—探求・川にちなんだ万葉集の歌—

万葉の川心 第24回

川崎市立木月小学校教諭　船田　園子

川に寄す（巻第七　一三八三番歌）

嘆きせば人知りぬべみ
山川の激つ情を塞きあへてあるかも

——うちはメニューはおいていないんですよ。

カフェアンドバーと書かれた店に入った。数人の客の向こうでソファに腰をおろしていたその女は、まるで店の一部のようにその空気に溶けていた。ママさんというのか、マスターというべきか。人生の甘さも辛さも十分味わったような落ち着きと、飾らない物言い。その人には確かに存在感がある。その女でなければ、この店は全てが壊れてしまうような激しい存在感が。それなのに、静かだ。

——カフェ・オレを

店には、低音の響くスピーカーから程よい音量でジャズが流れている。目の前で語る女友達の恋の悩みにうなずきながら、もう一人の自分が動き出す。それとは悟られぬように、自分のことを考えている。あのことを、打ち明けようかと思いながらも心の奥にしまっていく。取り乱して醜くなってしまうほどの激情を隠し持っていることを、人前で吐き出すほどには若くない。ゆっくりとカフェ・オレをひとくち飲んで、激つ想いを塞き止める。

心の動きは水に似ている。突然に渦巻き、滝のように落ち、揺れて流されて、また、打ったように静まり返る。万葉のこの歌で、「川に寄せて」詠まれているのは、自分の中にある情という名の川である。「あなたへの想いをどうすること山川の激流のようにさわぐ心を、じっとこらえているのです。」古代から山は神として祭られ、男女の性が授けられるなど、信仰が厚い。川という大自然もまた、決して背景や単なる景色なのではなく、人と融合されて表現されている。幾度となく洪水をおこし、人々は辛い思いを味わってきたであろう。それなのに、川を悪く詠んだ歌はないのである。何があっても最後はすべて許し合える家族のように、親友のように、川も人もそこにいる。何年も何年もそこにいる。私達は紛れもなく、万葉時代の人の数十代目の孫であり、変わらぬ人なのである。

友達が電話のため席を立った。カップをさげる彼女に、失礼にならぬ程に店の心地良さを伝えた。すると、彼女は珈琲に対するこだわりを教えてくれた。

大人の入り口はどこだったのだろうかと考える。はじめて「秘め事」をもったとき、それは始まっていたのかも知れない。誰かに言ってしまえばどんなに楽だろう。でも、言えば壊れてしまう。言葉に面をつけて命懸けで一つの嘘がつけたとき、一つの嘘を守れたとき、大人と呼べるのかも知れない。恋を楽しみ、辛さを楽しみ、激情を押え、冷やかに、艶やかに、そして、時折見せる子どものような素直さとまっすぐな想い。大人の味わいというのかしらん。

その店には、おいしい珈琲と、彼女の気持ちのいいプライドがあった。